日本バプテスト連盟　沖縄浦添キリスト伝道所
OKINAWA URASOE CHRIST MISSION

がじゅまる

●「摩文仁（まぶに）の丘へ」

ルカ７：３６～５０
－2002.6.23　主日礼拝宣教から－

（慰霊の日）

本日は沖縄戦が終わってから57年目の慰霊の日です。1945年６月23日、牛島満司令官が摩文仁の丘で自決しました。それをもって沖縄戦は終わったとされています。

（琉球が生きてきた道・平和外交）

沖縄が日本に組み入れられる以前は、400年以上に渡り独立した琉球王朝が栄えていました。琉球が生きてきた道は平和外交でした。資源がない。天災が多い。その風土の中でいかに生きていくか。選んだ方法は貿易でした。無い人の所に余っている所から持っていく。間を紡いでいく。相手を豊かにし、自分をも豊かにする。ところが、戦争があると貿易ができないのです。信頼関係があって平和がなりたちます。その信頼関係を得るために、武器を持たない国として琉球は心を配ってきたのです。

（沖縄の歴史）

1609年に薩摩藩の侵略がありました。武器を持たない琉球は数日間で侵略されました。1879年には明治政府が沖縄県として日本に組み入れます。「琉球処分」です。この呼び方は大和がつけたものです。皇民化教育が進められます。太平洋戦争において日本で唯一の地上戦が戦われ、住民を巻き込んだ戦争は県民の４分の１が命を奪われました。天皇制維持、本土防衛のための捨石とされるわけであります。戦後本土のみが独立し（1952年、サンフランシスコ講和条約）、沖縄は米軍支配のまま残されます。日本の平和憲法を信頼し、過酷な米軍支配からの解放を願う沖縄の闘争があります。1972年本土復帰を果たします。今年は本土復帰30年です。30年前の５月15日本土復帰の朝、沖縄の小学校５年生の作文が朝日新聞に掲載されました。

毒ガス、ばく音、ひき逃げ、B52･･･苦しかった沖縄。 復帰で沖縄はほんとうにすくわれるのだろうか。沖縄には、日本復帰で平和になりたいという願いがある。日本の人々よ、それに答えて、沖縄を平和な県にしてほしい。

「基地がなくなるぞ」と期待しました。しかし、逆に増えたのです。日本の0.6%の面積に日本の全米軍基地の75%が集中しています。沖縄では皇民化教育が徹底されました。天皇のために命を捨てる生き方こそが最高である。そのために日本で最初に「ご真影」が置かれました。神社を建立し国家神道に組み込まれました。沖縄独自の言葉を奪いました。方言を使うとスパイ嫌疑をかけられ命を奪われました。沖縄の名前から、日本風の名前に変更させられました。 大切にしている沖縄文化・アイデンティティを奪いました。そして沖縄での成功が、韓国、中国、台湾・アジアへと皇民化教育を進めていくのでした。

（罪）

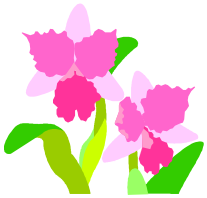
大和（本土）の犯してきた罪が重くのしかかるわけであります。加害者としての沖縄の責任もあるわけですが。今も振興策と引き換えに犠牲を押し付け、本土は平穏に暮らしている。本土が沖縄を踏みつけている現実を見せ付けられます。自分のこととして考えようとしない沖縄への無関心。それは私自身の罪であります。何かあると「沖縄は危ないぞ」。旅行もキャンセルし、簡単に切り捨ててしまう。そのような痛みを覚えるわけであります。私たちは先ず沖縄に対し悔い改め、その罪を告白する必要があります。そのことが、アジアの国々への戦責告白へとつながるのではないでしょうか。

6月23日「慰霊の日」来年のｱｼﾞｱ･ﾊﾞﾌﾟﾃｽﾄ女性大会の事前学習会のため来沖された6名の姉妹とともに韓国人慰霊碑の前で

（イエスさまの話）

ファリサイ派のシモンの家に招かれたイエスさまは快く応じました。街の罪深い女が、イエスさまが来ておられるということを知り、やって来ます。シモンの家は、女が足を踏み入れられるような場所ではありませんでした。しかし、女はイエスさまに赦された喜びが抑えきれずに居場所のない席にやって来たのでした。後ろからイエスさまの足もとに近寄り涙がいっぱいでました。その涙でイエスさまの足をぬらし、自分の髪の毛でぬぐい、足に口づけをして、持って来た高価な香油を塗りました。手足を洗い、香油を塗る行為は、本来招いた側が大切なお客さんに対してする行為でした。しかし、シモンはそれをしませんでした。イエスさまを大切に思っていなかったのでしょうか。自分と同程度に思っていたのかも知れません。罪深い女がイエスさまに高価な香油を塗りました。イエスさまがシモ

ンにたとえを話します。「金貸しから二人の男が金を借りていました。一人は500デナリオン。もう一人は50デナリオン。どうしても返せないので、金貸しは二人の借金を帳消しにして赦してやりました。このうち、どちらが多く金貸しを愛するだろうか。」 シモンが答えます。「そりゃ先生、沢山帳消しにして貰った方ですよ。」「そのとうりだ。」 そして女の方を振り向いて、シモンに言われました。「あなたはわたしをそれほど迎えてはくれなかったが、この女はできる限りのこと をして私を迎えてくれたのだ。だから言うが、この人が多くの罪を赦されたこと は、わたしに示した愛の大きさで分かる。赦されることの少ない者は、愛するこ とも少ないのだ。」 お金は罪を意味しています。女は自分の罪に目を向けその重さを知り、悔い改めました。 シモンは自分と女とを比較して自分の正しさを誇り、「この女よりは自分の方がましだ」と自分の罪をみつめようとしません。イエスさまは赦されることの少ない者は、愛することも少ないと言われます。言い換えますと、多く赦された者は多く愛するのです。100パーセント赦された者は、100パーセント愛するのです。10パーセント赦された者は10パーセント愛するのです。それが500デナリオンと50デナリオンの差だと言われます。シモンの姿に大和(本土)が重なって写るような気がします。 イエスさまは女に言います。 48節「あなたの罪は赦された」50節「安心して行きなさい」 人が赦すこと、また赦されることは困難があります。しかし、神のあわれみによって赦しをいただきたいのです。



(Aさんとの出会い)

阪神淡路大震災後、神戸の街で始まったホームレスの支援活動があります。そこで沖縄出身のホームレスのAさんと出会いました。82歳の彼は野宿生活で体を壊し、もう歩けません。おにぎりとみそ汁を持って夜訪ねます。「Aさん」と呼ぶとダンボールが揺れて、下から声がします。「キリストか。」 教会から来ているのでそう呼ぶのです。 彼の信仰告白のように思えます。Aさんは建築現場で日雇いをしてきましたが、年を取り健康を害するとだれも雇ってくれません。敗戦時、彼は中国に出兵していて沖縄に帰ろうとしましたが、米軍領となっていて沖縄には帰れません。東京に出て結婚しましたがお連れ合いを亡くされました。子どもとは長く会っていません。生きていると54歳になるそうです。市役所まで一緒に行く車の中で、ラジオから沖縄の歌が聞こえてきました。するとAさんは車の中で足の痛いことも忘れて「沖縄の歌や。沖縄の歌や。」踊りだしたのでした。故郷沖縄がAさんのルーツとして染み付いています。Aさんは入院しました。その後、私は沖縄にやって来ました。Aさんはどうしても沖縄に帰りたいと言う思いがあって、病院を無断で抜け出し、鹿児島まで一人で行きました。そこからどうすることもできずに、ただ、沖縄の海を見つめてまた神戸に帰ったそうです。支援活動を続けている教会の方から連絡がありました。そして、同じ場所でボランティアに発見され救急車で入院しました。82歳になっても居場所を求めてさまよう。彼の人生を奪い、居場所を奪ったのはいったい誰なのか。考えさせられるわけであります。私は彼と出会って沖縄に行きたいと思いました。そして、彼をそうさせたのは、戦争・大和の罪だと今思うのであります。60年ぶりに故郷沖縄に帰りたいという彼の気持ちを大切にし、沖縄で住居を探すことになりました。彼は人生で最後の地、沖縄を求めてやってくるのです。

(愛する)

愛は関係を持っていくこと。関係を作り上げ、立て上げていくことです。切ってしまわない。神は私たちに全面的に関与して下さるのです。

（無関心の罪）

６月８日、北谷で有事法案反対の県民集会が開かれ参加しました。沖縄にとってどうしても譲ることができない法案なのです。人に対する無関心、無関与。それは罪ではないでしょうか。人に出会って立ち留まる教会。教会が揺さぶられ倒れそうになります。それでも人に出会って立ち留まろうとする。そんな教会っていいなと思います。

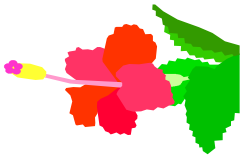
（安心して行きなさい）

イエスさまは女性に「あなたの罪は赦されましたよ」「安心して行きなさい」と言われました。今までその職業のゆえに、罪のゆえに自暴自棄になっていた。「自分なんかもうどうなってもいい」。そう思っていたかも知れません。その女性に対して無条件の赦しを宣言されました。「あなたを大切にして、安心して暮らして行きなさい」。生活の場へと送り出されたのであります。この女性は、イエス・キリストに仕えるように、喜びをもって他者に仕えたのではないでしょうか。「あなたの罪は赦された。安心して行きなさい。」　イエス・キリストの私達へのメッセージであります。

（摩文仁の丘へ）

今年は敗戦後57回目の６月23日がやって来ました。沖縄戦で人々は追いつめられ南へ南へと逃げました。もうこれ以上逃げ場がない摩文仁の丘には「平和の礎」が建てられています。沖縄戦で命を奪われた23万人の名前が石に刻まれています。日本人も外国人も。歳が分からない子どもも。石の前に跪き、石に刻まれた愛する人の名に手を沿え、涙ぐむ姿を見ます。摩文仁の丘には人間の罪が凝縮されています。そしてその罪を見つめようとする時、「あなたの罪は赦された。安心して行きなさい」とのイエスの宣言を聞くのです。そしてそこから、「平和を実現する者」として派遣されて行くのです。十字架と復活の希望の摩文仁。今日も私達はイエス・キリストの「摩文仁の丘」へと向かうのです。

（沖縄浦添伝道所牧師　岡田有右）



★宮古バプテスト教会の牧師就任式・献堂式

城間先生ご夫妻と端慶山先生ご夫妻

６月24日、宮古バプテスト教会（沖縄バプテスト連盟）で瑞慶山道弘牧師の就任式と宮古教会の献堂式が行われ、沖縄バプテスト連盟牧師会の１泊ツアーに入れていただき、岡田牧師夫妻が出席しました。沖縄や本土から多くの方々が出席されました。城間祥介牧師御夫妻、教会員のこれまでのお働き、また新しい牧師を与えられてのこれからの歩み。それぞれの地域に与えられた教会の働きを通して神の業が力強く進められていることを教えられ、神の幻を見せていただきました。

金曜集会の声

「アメリカ領事館前で、女性達が金曜集会をやってるよ」とクリスチャンの友達から聞き、行ってみることにしました。各々思い思いの横断幕を持ち寄り、領事館前の横断歩道の金網にかけ、昼の12時から１時まで、それぞれの思いを語ったり、報告をしたり、歌を歌ったり、とても自由な雰囲気な集会でした。この地に在日全米基地の75%が集中し、住宅地に密接し、そして軽減どころか最新化、固定化されようとする今、「それはないんじゃない」と女達が主体となって、この基地がなくなるまで･･･と始まった金曜集会です。普通のおばさん（わたしと同い年位）が、普通の生活の場から参加して訴え続けていく会です。2002年7月19日で50回を数えました。Tさんは、「こんなところで（自分の考えとは反対にベトナム、湾岸、アフガン戦、ここからの出撃を許し、加害者になっている）生かされていることが、悲しいんです」。毎週金曜日、断食して、参加されています。また、Kさんは、「もし、基地がなければもっと他の事にエネルギーが注げたと思う」とおっしゃった言葉が私の胸にぐさりとささりました。生まれる地と親を選べないというけれど、ここに生まれた同い年位のKさんは半生をこのことにそそいでいます。その同じ年月、私は、といえば…そんな思いから、今回は彼女たちの声をお届けします。

「日米の植民地にされている沖縄に来て、ヤマトの人に沖縄のことはわかったといってほしくない。本土にも問題があるから、本土に帰って、立たされているところの問題に真剣に取り組んでほしい。」

「テロで沖縄修学旅行を心配してキャンセルされたなら、沖縄には同じこどもを持つ同じ親達がいる、そんな危険な沖縄の基地をそれなら担いましょうという運動が起こってほしかった」

「基地問題が解決したら、三線を習って、歌い、琉球舞踊が踊れるようになりたい。」

「平和ガイドをして２０年、本土の方々に訴えても訴えても沖縄は基地が減るどころか、だんだん悪くなってきています。本土の方々、ピザの配達じゃないですが、いつでも、どれだけでも配達します。

「物心ついた頃から反基地闘争。日米両権力に対する闘いがあった。何度も絶望感を味わったし、逃げ出したいと思った。県民のこれまで使われたエネルギーを思うと怒りとくやしさで体が粉々に砕けそうになる。基地問題がなければという仮定には答えようがない。

「平和な社会を創造していこうとする努力、共にいきる社会を願う心に沖縄、本土という壁はありません」

「答えられない、質問」です。気が付いたとき、生活の中に、私の人生そのものの中に基地がはいり込んできていたからです。

「日米の植民地にされている沖縄に来て、ヤマトの人に沖縄のことはわかったといってほしくない。本土にも問題があるから、本土に帰って、立たされているところの問題に真剣に取り組んでほしい。」

「沖縄で生きていなければ、わたしだって本土の人たちと同じように自分とまわりの人たちの幸せを願ってそれなりの努力をし、平穏に生きていたのだろと思う。沖縄で生きることで、物事の本質が少しは見えるようになったし、弱者の立場にたつ事も当たり前として感じられるようになったし、絶望的な日々の中でも、いくらか自分を信じることができる。人それぞれの人生だし、何も言うつもりはない。でも、これほどの呪阻の対象をなっている日本という国が栄えることはないだろうと思っている。

浦添伝道所に出席しています。

飯田真理絵

沖縄に来て３年目になります。大学進学の為沖縄に住むことになったのですが、教会生活から離れていました。何回か行った教会では私が、芸術大学の音楽を専攻しているということで奏楽を頼まれたこともありましたが、なかなか教会に通うというところまではいきませんでした。2001年12月４日、浦添伝道所の開所式がありました。私は以前、宮崎にいたのですが、蓮池牧師から、岡田夫妻の沖縄での活動を聞き、開所式に参加し、奏楽の奉仕をさせていただきました。小さな一室に大きくかかげられた木の十字架は、とても印象的でした。沖縄に来てこの日が私の教会生活スタートの日となりました。以来毎聖日の奏楽奉仕をさせてもらっています。

沖縄生活と同時にはじめたアルバイトも３年目になるのですが、そのレストランにご飯を食べに来てくれる、おじーは、すべて沖縄方言で話されます。沖縄方言というと、連ドラ「ちゅらさん」で話されていた言葉が思い浮かぶと思いますが、単語、単語、所々に方言を使う沖縄弁は、まだかろうじてどんなことを言ってるのか想像がつきますが、そのおじーの話す言葉は一つ一つ全て沖縄の言葉でどんなことについて話しているのかさえ聞き取れないことがほとんどです。そのおじーはいつもニコニコしながら沖縄方言で楽しそうに話されますが、不意に真剣な表情をされる時があります。それは戦争の頃の話をされている時です。沖縄の人は半端なく明るく温かくて楽しい人がたくさんいます。しかしそれと共に深い悲しみ、忘れることの出来ない歴史を抱えて生きてきた人たちであることもまた事実です。沖縄イコール、楽しいリゾート地または癒しの地という視点だけで沖縄をみてしまいがちな私ですが、もっと沖縄についてそして沖縄の人について知りたいと思うのです。

沖縄浦添キリスト伝道所
ホームページ開設！！

http://www9.ocn.ne.jp/~ucc/

● 編 集 長 ： おかだふみこ
● 発行責任者： 岡田有右
● 発行年月日： ２００２年８月２８日

〒901-2121 沖縄県浦添市内間１丁目10-16-201
TEL/FAX 098-942-4775　牧師館 098-875-0707

● 編集後記　残暑お見舞い申し上げます！

帽子、日傘が必需品。台風5～7号の挨拶もいただく。抜け道を行き巡るのが楽しい。ふとした路地、小さな畑に「欲しい方、ご自由にお持ち帰りください」との立て看板、お言葉に甘え、大葉を7､8枚頂戴す。こんなところにも沖縄が、感動の帰路でした。